

# インド土着文法における分析と総合

小川英世

○. パーニニの文法は、彼の時代（紀元前4世紀頃）と地域（西北インド）の正しい言語使用を説明する規則の体系である。彼にとって文法規則の本質的な目的は、正しい使用に一致する語形の派生である。パーニニ文法では形態論と統語論とが密接に結びついており、その派生組織は、相互に関連した、動詞語尾に終る言語項目（linguistic item）と名詞語尾に終る言語項目との連鎖を結果的に導出する。こうしてパーニニ文法が扱う言語単位（linguistic unit）は、最大の単位としての文（vākya）およびその構成成分としての語（pada）であり、文の連鎖としての「談話」とか「テキスト」と呼ばれるような単位はパーニニ文法の対象外である。このパーニニ文法の派生組織では、文法規則は言語の構造的な分析を前提し、それが規定する文法操作は総合的である。すなわち、高次言語単位から構造的な分析によって有意義単位の分離がもたらされ、さらにある〈意味<sup>①</sup>〉が表現されるべき時に低次有意義単位を総合してより高次の有意義単位を形成するように文法操作が規定されている<sup>②</sup>。

本論文はパーニニ文法の継承者達がパーニニ文法の派生組織における分析的技法と総合的技法をどのように評価し理論化しているかを示す。

1. 先づパーニニ文法の派生組織の一端を紹介し、語派生から必然的に結果する文派生の過程を見てみることにしよう。

パーニニ文法の派生組織にとって基本的なのは、基体（prakṛti）と接辞（pratyaya）の区分である。

(1) P4.1.1 「『接辞』と呼ばれる項目は女性語尾（ñ）ī, ā(p)で終る項目、あるいは名詞語幹（prātipadika）の後に起こる。<sup>③</sup>」

(2) P3.1.91 「『接辞』と呼ばれる項目は動詞語根（dhātu）の後に起こる。」

文法は動詞語尾あるいは名詞語尾で終る項目を派生するために、所与の条件下で基体の後に接辞を導入することを規定している。

今炊事という行為 (pacikriyā) にデーヴァダッタと呼ばれる人と飯 (odana) とがそれぞれ<動作主> (kartṛ)、<目的> (karman)として関与している事態は、サンスクリット語では次のように表現される。

1) devadatta odanaṁ pacati (「デーヴァダッタが飯を炊いている。」)

2) odanaḥ pacyate devadattena (「飯がデーヴァダッタによって炊かれている。」)

連鎖1)と2)は等価関係にあり、上記の事態に対していずれの表現形式をとるかは任意である。

パーニニ文法では、連鎖1)と2)に次のような理論的構造体 (alaukika-vākya) が対応する。

1)' devadatta-s odana-am pac-a-ti

2)' odana-s pac-ya-ta devatta-ā

devadatta-sは固有名詞devadattaの主格単数形、odana-amは飯を表わすodanaの目的格単数形、pac-a-tiは炊事行為を表わす動詞語根√pacの第三人称・単数・現在・能動形、odana-sはodanaの主格単数形、pacya-taは√pacの第三人称・単数・現在・受動形、devadatta-āはdevadattaの具格単数形である。

理論的構造体1)'、2)'は形態音素規則の適用を受けて1)、2)の現実に運用される連鎖として実現される<sup>①</sup>。

さて、これらの派生において、基体の後に接辞が生起することを許す規則は次のとおりである。

動詞語尾：(3) P3.4.69「<動作主>あるいは<目的>が表示されるべき時、動詞語根の後にLが導入される。<目的>をもたない動詞語根の後では、動

作態あるいは<動作主>が表示さるべき時導入される。』

Lは10種の動詞語尾群のシンボルであり、その導入は時制と法によって条件付けられている。連鎖1)と2)に関しては laṭ が導入される。

(4) P 3.1.133 「動詞語根の後に、その動詞語根によって表示される行為が現在に関わる場合、laṭ が導入される。」

こうしてLの導入条件はL一般として(3)、特殊L (laṭ) として(4)により規定されている。

さらにLは定動詞語尾によって代置される<sup>⑨</sup>。

〔支配規則〕(5) P3.4.77 「Lのかわりに」

定動詞語尾：(6) P3.4.78 「[ I ]① ① ti(p) ② tas ③ jhi, ② ① si(p) ② thas ④ tha, ③ ① mi(p) ② vas ④ mas, [ I ]① ① ta ② ātām ④ jha, ② ① thās ② āthām ④ dhvam, ③ ① i(ṭ) ② vahi ④ mahi(n)」

——「Lのかわりに ti(p) 等〔略符 tiñ 〕が生起する。」

この段階から pac-a-ti, pac-ya-ta の形成に至るまでには次のような制限規則が適用されて、Lに代置される定動詞語尾の選択がせばめられる。

[ I ]群、[ I ]群の導入：(7) P1.3.78 「残余の〔先行規則P1.3.12—77で扱われなかった動詞語根の〕後に、<動作主>が表示さるべき時 [ I ]群 (parasmaipada) が導入される。」

(8) P1.3.13 「動作態あるいは<目的>が表示さるべき時 [ I ]群 (ātmanepada) が導入される。」

数系列①—④：(9) P1.4.22 「双数性、単数性が表示されるべき時、それぞれ② (dvivacana) と① (ekavacana) が導入される。」

人称系列①—③：(10) P1.4.103 「残余のもの〔一人称代名詞、二人称代名詞以外のもの〕がたとえ想定上の存在であっても (sthāniny api) 共起項目 (upapada, cooccurring item) であり、しかもこの共起項目が指示するもの

とLの代置要素が指示するものが同一である時、①系列 (prathamā) が導入される。」

この ti(p) ([ I ]①) 、 ta ([ I ]①) 選択の次段階に接辞(ś)a(p)、 ya-(k) が導入され、<sup>⑧</sup>こうして pac-a-ti、 pac-ya-ta が得られる。

一方名詞語尾の場合、動詞形の派生において使用されたLのようなツンボルは設定されていない。(1)の支配下に直接名詞語尾の生起が一般的に規定される。

(1) P4.1.2 ① ① s(u) ⊕ au ⊙ (j)as, ② ① am ⊕ au(t) ⊙ (ś)as, ③ ① (t)ā ⊕ bhyām ⊙ bhis, ④ ④ (ñ)e ⊕ bhyām ⊙ bhyas, ⑤ ① (ñ)as ⊕ os ⊙ ām, ⑥ ① (ñ)as ⊕ os ⊙ ām, ⑦ ① (ñ)i ⊕ os ⊙ su (p) 数系列①—⑦選択の条件は動詞語尾の場合 (9) に準ずる。<sup>⑧</sup>

①—⑦の各三者組導入は、意味条件〔「<意味>Mが表示さるべき時」〕と共起条件〔「項目Iが使用される時」〕とによって条件付けられている。当該の連鎖1)と2)における名詞語尾はすべて意味条件下に導入される。<sup>⑧</sup>

主格語尾：(2) P2.3.46 「名詞語幹の<意味>だけ、名詞語幹の<意味>に性だけあるいは量だけが加わったもの、または数だけが表示さるべき時、主格語尾が導入される。」

目的格語尾：(3) P2.3.2 「<目的>が表示さるべき時、目的格語尾が導入される。」

具格語尾：(4) P2.3.18 「<動作主>あるいは<手段> (karaṇa) が表示さるべき時具格語尾が導入される。」

<動作主>、<目的>、<手段>等は純粹に文法的な術語であり、総称して kāraka (「行為の関与者」) と呼ばれ、文法的表現と意味関係を媒介する。<sup>⑧</sup>

ところで、規則(3)と(4)によって導入される名詞語尾の kāraka 表示は、動詞語尾による kāraka の表示に従属する。この名詞語尾と動詞語尾による k-

āraka 表示の主従関係は次の規則によって示される。

(5) P2.3.1 「Xが表示されていない時」

これは(3)、(4)に対する支配規則である。従って目的格語尾〔②〕の場合、〈目的〉が他の項目によって表示されていないという条件下で〈目的〉が表示さるべき時それが導入される。連鎖1)において〈動作主〉は動詞形 *pacati* の接辞 *ti* によって表示されているから〔(7)〕、*devadatta* の後に具格語尾〔③〕は生起せず、(2)に基づき名詞語幹の意味だけが表示さるべきであるという条件下に主格語尾〔④〕が生起する。一方〈目的〉は *ti* によって表示されていないから *odana* の後に目的格語尾が生起する〔(13)〕。連鎖2)における *devadatta* の後の具格語尾導入、*odana* の後の主格語尾導入にも同様の手続が踏まれる。動詞形 *pacate* の接辞 *te* によっては、〈目的〉が表示されている〔(8)〕。

名詞語尾あるいは動詞語尾で終る項目は語 (*pada*) と呼ばれる。連鎖1)、2)の派生手続きは、語派生が統語関係に規制されていることを示している。

規則(5)によって動詞語尾による *kāraka* 表示の優位性が示されていることを指摘した。名詞語尾で終る項目の形式は、動詞語尾で終る項目の形式によって決定される。従って前者は必ず後者を予想し、前者の派生の観点から言えば、名詞語尾で終る項目の実現は同時に上位の構造体である文の実現であると言える。

規則(10)は定動詞語尾の人称系列の選択が定動詞語尾と同一指示性の関係にある共起項目の存在に依存することを述べている。この規則は「たとえ想定上の存在であっても」(*sthāniny apy*)<sup>⑧</sup>ということばによって、*devadattaḥ—sa*〔三人称代名詞〕*pacati* / *pacati* 両形式の派生を許す。Lの代置要素と同一指示性の関係にある共起項目が形式的に実現されなくても、現実的であれ想定上であれその共起項目の生起が認められなければ、人称系列の選択は為し得ない。逆に言えば表現 *pacati* の基底にも文を実現し得る深層構造が認められ

るのである。こうして動詞語尾で終る項目の派生の観点からは、動詞語尾で終る項目の実現は同時に上位の構造体である文の実現であると言える。<sup>⑩</sup>

さてここでパーニニ文法の派生組織に関する所見として次のことが言い得よう。すなわち、パーニニにとっての主要な関心事は、上位構造体としての文のうち現われる語形とそのような語形間の関係であり、彼の派生組織はその忠実な反映である。

2. パーニニは、「文」(vākya) という語を三つの規則において使用し、さらにはその語の派生をすら扱っているのにもかかわらず、文そのものについて何等定義を与えていない。<sup>⑪</sup>しかし次のメタ規則が考慮されるべきである。

(16) P 2.1.1 「語 (pada) に関する文法操作は 意味的に結びついているものに関わる。」

この規則は、二つの言語項目間の意味上の関係が統語関係を決定することを示している。例えば、連鎖 1) において、odanam は飯を<目的>として表示している。しかし炊事行為に対してデーヴァダッタを<目的>として表示することは異常である。pacati という動詞形には、炊事行為に対する<目的>として表示されるに適わしいものが選択されねばならないから、それとの共起項目に関し選択制限の現象が認められる。このように(16)による目的格語尾の導入は、意味関係を無視しては成立しないのである。

これはまた、ある言語項目の連鎖が文として認められるかどうかは、その言語項目の間に意味関係が認められるかどうかに依存するということでもある。

パタンジャリによれば、このような統語項目間の意味関係はそれら統語項目の「意味の相互依存」(vyapekṣā) に他ならない。<sup>⑫</sup>すなわち、ある連鎖 {x + y} から統語項目 (syntactic item) x を分離したならば、統語項目 y に x に対する期待が生じ、一方その連鎖が「意味の相互依存」に見合った形で x と y から構成され、その連鎖に対応する<意味>が充足性 (nirākāṅkṣatva) とあ

るまどまり (parisamāpti) とを示すならば、その連鎖はまさしく文と認められるのである<sup>⑧</sup>。「意味の相互依存」が文派生の原理として機能するパーニニ文法の派生組織では、文は語の単なる集合ではなく、意味論的に規定された構造体である<sup>⑨</sup>。

3. ところで、パーニニの文法体系に関し、パーニニ文法の後継者達の間には「文法の哲学」とも呼ばれるべき言語理論の価値に対する内省が生まれている。言語の使用とその記述とは異なったレベルに属するという自覚がそこには働いていた。彼等パーニニ文法の後継者達は、言語使用による情報伝達の観察から真に情報伝達的手段として機能するものは文であることを実証し、さらには文および文の〈意味〉の無部分性を主張するに至った。彼等によれば、情報伝達の場合である連鎖が発声された時我々の注意が向うのは〈意味〉そのものへであってその言語構造へではない。従って、その連鎖はまさに全体的に捉えられ、分節性を意識して有意味単位の連続として捉えられることはないし、またその連鎖の〈意味〉も閃光のようにたちどころに捉えられ、意味単位の積上げによって構造的に捉えられるのではないとされる。すなわち、パーニニ文法の後継者達は、情報伝達の場合で表意者とその〈意味〉の理解に階層性を認めないのである。

周知のようにパタンジャリはパーニニの文法体系を指して「正しい語の形成に関する教示」と呼んでいる。カーチャーヤナによれば文法とは〈特徴付けられるもの〉としての正しい語とそれを〈特徴付けるもの〉、すなわち〈説明するもの〉としての文法規則から組織される<sup>⑩</sup>。語派生が文という構造体の前提なくして成立しないことはすでに見たとおりである。こうして文法は具体的な言語使用の場合における真の情報伝達者である文を説明する。しかも文を構造的に捉えて説明するのである。

ここに文の階層化をどのように評価するかという問題が起こる。

4. 文の階層化とは連鎖1)を連鎖1)'の相で見るということである。次のナーゲーシャの言明は、言語の実際的使用と文法的手続きとの対立、基体と接辞にまで至る文分析が要請される理由、そしてその方法とを明示している。

「この〔文の無部分性が我々パーニニ文法学派の原則であるが〕、文ごとに言語規範を認識することは不可能であり、また〔以下に述べること以外の〕容易な方法で〔可能なすべての〕文を説明することはできないから、〔パーニニ等の〕学匠達は概念的な構想 (kalpanā) によって〔文を〕語に、語を基体と接辞という部分に分析し、概念的に構想された〈肯定的随伴〉 (anvaya) と〈否定的随伴〉 (vyatireka) とによって、理論活動の範囲でのみ有効な〔基体と接辞〕それぞれの〈意味〉の区分を設定した。」<sup>⑧</sup>

文の階層化は部分・全体の概念的構想に基づく〈抽象〉 (apoddhāra) によって為される。<sup>⑨</sup>

さて、炊事行為に対してデーヴァダッタと飯がそれぞれ〈動作主〉、〈目的〉として関与している事態Xに対応して連鎖1)が選択使用されたとしよう。言語規範とは言語と〈意味〉の間の対応関係に関する取決である。事態Xと連鎖1)の対応関係は連鎖1)の異形、例えば *pacati devadatta odanam* にも妥当するであろうか。厳密には連鎖1)とその異形は同一ではないから、事態Xに対し連鎖1)とその異形5種による六通りの対応関係が想定されなければならない。しかしながら、連鎖1)とその異形はいずれも同一の意味構造「デーヴァダッタを〈動作主〉とし飯を〈目的〉とする炊事行為」をもっている。<sup>⑩</sup> もし連鎖1)とその異形とが類型化され得るならば、事態Xに対するそれらの対応関係は単一化されるであろう。

類型化は共通な下位言語単位の〈抽象〉によって可能となる。同一の意味構造をもつ連鎖1)とその異形が共通の項目より構成されているとみなされる時、連鎖1)とその異形間の差異は捨象される。



う<意味>をもつ有意義単位として連鎖 I より抽象されるのである。<sup>5)</sup>

5. このように語や基体、接辞は上位言語単位を類型化して説明するために、<意味>に基づき、方法論的に規定された一定の操作を経て概念的に設定される抽象的単位である。ところで、文分析の究極にある基体と接辞の区分は、文法操作のレベルで要請される。そして文法規則に直接取り込まれている文分析の結果は、接辞とその<意味>である。

さて今問題となるのは動詞形 *pacati* からの接辞の<抽象>である。

文法規則の定式化において経済原則を最優先させるパーニニは、動詞語尾群のシンボルとして L を使用した。文分析の究極に L のような項目は決して現われない。それにもかかわらずパーニニは規則(3)と(4)において文分析の結果として得られる *ti* ([I]①④)ではなく L に<意味>を充てているのである。

パーニニは、代置法によって L と *ti* を結びつけている〔(5)、(6)〕。文法操作は<転移規則>によって<原要素>L の属性が<代置要素>*ti* に転移されるという形で、*ti* に L の<意味>が与えられる。

ナーゲーシャは L も *ti* も共に概念的な構成であることを認めて、L と *ti* に関する<有意義性>を次のように説明している。すなわち、文法術語としての L はある種の人工言語であり、*ti* は言わば日常言語の論理的分析によって得られたものである。むしろパーニニが規則(3)と(4)の定式化にとった手続きは、*ti* の<意味>の L への転移であったと言うべきである。<sup>6)</sup> こうしてナーゲーシャによれば、L も *ti* も共に有意義なのであり、ただ意味設定の過程あるいはレベルに違いがあるだけである。

6. 文法規則の定式化が文分析を前提しているのに対して、文法操作は上位言語単位から抽象された低次有意義単位を実体化し、高次有意義単位の総合を志向する。それがまた派生組織の基本でもある。連鎖 I) の派生において、規則(3)は(9)と相俟って、単一の飯が<目的>として表示さるべき時に、基体 *odana*

の後に接辞 am が導入さるべきことを規定している。odana は飯という〈意味〉に対応して基体として抽象されたものであり、am は〈目的〉と単数性という〈意味〉に対応して接辞として抽象されたものである。一体規則(8)と(9)によってそれらから形成される odanam はリアルなものであろうか。実際下位の言語単位がリアルなものであるならば、それらから構成される全体もまたリアルなものであり得よう。しかし究極的には上位言語単位からの〈抽象〉の結果は概念的構成であるから、それらの構造体はどこまでいってもリアルなものではあり得ない。こうして総合によって結果する構造体も概念的構成に他ならない。<sup>⑧</sup>

7. パーニニ文法の後継者達は言語の理論を「概念的な構想」によって正当化した。言語使用の場における具体的な文は、絶対的に不可分で論理的な分析の網にかからないからである。彼等はパーニニ文法の派生組織における分析的技法と総合的技法のいずれもが「概念的な構想」の所産であることを明示する。「概念的な構想」は〈取捨的認識〉(nirūpaṇāpratyaya) である。それは實在の部分的アスペクトを表象し得るだけであり實在の全貌を表象し得ない。しかしそれは「転倒知」(viparyaya) ではない。<sup>⑨</sup>従って、言語の理論である文法は「概念的な構想」に立脚するものであるとしても、正しい言語使用を導くことができるのである。

注

本稿を著すにあたり、G. Cardona 教授の "Pāṇini, A Survey of Research" 及び同書に挙げられている教授の諸論考を参照し、得るところ多であった。尚またインド留学中文学関係の諸テキストを御講読下さった今は亡き我が師、故 K. A. Sivarama-krishna Sastri 氏にこの場をかりて衷心よりの謝意を表する次第である。

〔略語〕 ALB : The Adyar Library Bulletin, JIP : Journal of Indian Philo-

sophy, LM : Laghumūjūṣā, Mbh : Mahābhāṣya (Bh : Bhāṣya), PLM : Paramalaghumañjūṣā, VP : Vākyapadiya, vt : vārttika.

- ① 筆者は本稿で<意味> (artha) を次のような意味で使用する。インド意味論では「言語項目Xが事物Yに起こる」(ayaṁ śabodo 'sminn arthe vartate) という表現が用いられる。「arthe」(「事物に」) は於格語尾による表現であるが、この於格語尾は領域を示している (viṣayasaptami)。従って上記の表現は、「言語項目Xを<動作主> (kartṛ) とし事物Yを領域とする生起 (vṛtti) 」(X-śabda-kartṛka-Y-viṣayakavṛtti) とパラフレイズされ得る〔<生起> (vṛtti) が言語項目Xと事物Yとの連結リンクとして機能し、新正理学派の術語で言えば、<生起> はXに対し<依所性> (ādhāratā) の関係にあり、Yに対し<対象性> (viṣayatā) の関係にある点に注目せよ。これは、「指示機能」として扱われる vṛtti の概念の解明に手がかりを与えるであろう〕。簡単に言えば、「言語項目Xが事物Yの領域に起こる」ということである。ところで事物Yの領域はYを非Yから区別する要素を確定することによって定まる。インド意味論ではこの区別要素を「言語使用の根拠」(pravṛttinimitta) とか「指示物性の限定者」(śakyatāvachchedaka) と呼ぶ。筆者は、言語項目Xは事物Yの領域を表示し、その領域下にある個々のYを指示するというように<表示>と<指示>を使い分け、表示対象と指示対象の双方に<意味>という語をあてる〔インド意味論におけるこの意味での<表示>と<指示>の区別は、「同一指示性」(sāmānādhikarāṇya) の考えにおいて明らかである。「同一指示性」は二つ (あるいは二つ以上) の領域の重なるの部分において成立するからである。cf. Pradipa (Rohatak) I, p.62 bhinnapravṛttinimittaprayuktasyānekasya śabdaṣyaikasminn arthe vṛtṭiḥ sāmānādhikarāṇyam〕 cf. G. Cardona, JIP 2, pp.289-91.

② cf. G. Cardona, ALB 32-32, p.352, fn.1

③ 両規則とも P3.1.1-2 の支配下にある。支配規則は被支配規則に読み込まれる (anuvṛtta)。規則の和訳中の下線部は読み込みの部分にあたることを示す。

④ devadatta-s → devadatta-r (P8.2.66) → devadatta-y (P8.3.17) → devadatta-ϕ (P8.3.19)

odana-am → odanam (P6.1.107) → odanaṁ (P8.3.23)

odana-s p → odana-r p (P8.2.66) → odanaḥ p (P8.3.15)

devadatta-ā → devadatta-ina → devadattēna (P6.1.87)

pac-yata → pac-ya-te (P3.4.79)

このように派生の終極にあって現実に運用されるものとして実現される形態は「完成形」(pariniṣṭhita) と呼ばれる。ナーゲーシャによれば「完成形」は次のように定義される〔PLM(Shukla), p.203〕。

Df. (x = 完成形) : x は適用されていない義務的規則の、被規定項性の限定者を

もたない。

例えばP8.2.66は odana-s の段階ではまだ適用されておらず今適用されようとしている義務的規則である。この段階には語 (pada) の最終要素の s であること、という当該規則の被規定項性の限定者が存在する。一方 odanaḥ にはその限定者は存在しないから、odanaḥ が「完成形」とみなされる。

- ⑤ Lは分詞接辞によっても代置される。cf. P3.2.124
- ⑥ (ś)a(p) : P3.1.68 ya(k) : P3.1.67
- ⑦ ㊦ (bahuvacana) : P1.4.21
- ⑧ 共起条件下に導入される名詞語尾は upapadavibhakti と呼ばれる。cf. P2.3.8
- ⑨ kāraka が導入条件である名詞語尾は kārakavibhakti と呼ばれる。
- ⑩ sthānin <sthāna+in(i) [P5.2.115]。sthāna は「仮定的生起」(prasaṅga) を意味する。cf. <代置要素>と<原要素>の項。
- ⑪ 主格語尾の導入を規定している⑩は、名詞語尾で終る項目 odanaḥ 単独の表現を許す。主格語尾は「kārakaが表示されている時」あるいは「動詞語尾が指示するものと同一のものが表示さるべき時」導入されると規定するカーチャーヤナは、その表現を odano'sti [ 'sti=asti, √as の第二人称・単数・現在、“存在する”] に等価なもののみなし、主格語尾導入を正当化している。cf. vts.ad P2.3.46
- ⑫ P6.1.139, 8.1.8, 8.2.82に「文」という語の使用が見られる。vākya <√vac+(ṅ)ya(t)の派生に関する説明は、P7.3.67によって間接的に与えられている。
- ⑬ <統合形> (vr̥tti) と呼ばれる、統語項目 (pada) の基体の内部構造に関わる意味関係は「意味の統合」(ekārthibhāva) と定義される。  
「意味の統合」とは、例えば複合語といった<統合形>に、独自にそれと対応する<意味>を認めるということである。
- ⑭ cf. Uddyota (Rohatak) I, p.533, PLM, pp.10-11
- ⑮ パーニニ文法家で文の定義を明述したのはカーチャーヤナである。1)「動詞形は不変化詞、kāraka, kāraka に対する修飾語と共に文を構成する。」2)「単一の動詞形を含むものが〔文である〕。」(vts.9-10 ad P2.1.1) これらの文定義がパーニニ文法の派生組織における動詞形派生の優位性に完全に合致する点に留意するべきである。cf. 規則⑩。
- ⑯ Mbh (Kielhorn) I, p.12, vt.14
- ⑰ PLM, p.13
- ⑱ cf. VP (Iyer) III, pt.i, p.3, 2 amśāmśīkalpanayā apoddhāre.....
- ⑲ インド意味論では文から得られる意味認識 (śābdabodha) の構造がパラフレイズによって示される。パラフレイズの目的は意味構造の核を示すことである。勿論パーニニ文法家にとっては、動詞語根の<意味>である行為が文の意味構造の核である。cf. 註⑮

- ⑳ cf. *ibid*, p.2, 16. パタンジャリが言語を定義して「発声された時、それによって<意味>の理解が生ずるもの」と述べていることが想起されるべきである [Mbh I, p.1]。
- ㉑ cf. *ibid*, p.2, 6-8
- ㉒ 厳密には、上位言語単位の<意味>は下位言語単位の<意味>の総和に等しいとはみなされない。上位言語単位の<意味>には下位言語単位の<意味>間の<関係> (saṃsarga) が要素として含まれるからである。cf. Mbh I, p.462, 4-5. インド意味論では、上位言語単位の<意味>に現れる<関係>についてその認識根拠を明らかにすることが主要課題となっている。
- ㉓ 語抽象の具体的記述は *op.cit.*, p.3, 1-4、基体と接辞に関しては Mbh I, pp.219-220, 255-256 を見よ。<肯定的随伴>と<否定的随伴>の観察による<意味配当>が妥当しない場合もある。パーニニ文法では例えば接辞(ś)a(p) [vikaraṇa] に対応する<意味>は確定されない。cf. VP I, k.167
- ㉔ cf. P1.1.49 パーニニ文法家は、文法操作のレベルで「<代置要素>Xが<原要素>Yに代置される」と語することは、Yは仮定上生起するものとみなされる (prasaṅga) が実際には生起せず、代ってXが使用されることであると説明する。
- ㉕ P1.1.56
- ㉖ PLM, p.138, 8-9
- ㉗ PLM, p.15, 6-7
- ㉘ VP II, pt.i, p.162, 11-12; LM (KS S163), p.358

(広島大学)

## Analysis and Synthesis in Indian Native Grammar

Hideyo Ogawa

In this paper I dealt with the problem of how the Pāṇinīyas evaluated the analytical and synthetic methods in the derivational system of the Aṣṭādhyāyī.

The Pāṇinīyas distinguish between the performance of a language and the theory of it. In actual usage, language is far from being hierarchical (base-affix/word/sentence); only through mental construction (kalpanā), can it be viewed in terms of a construct (samudāya). The methods involved in the Aṣṭādhyāyī's derivational system indicate that linguistic units must be posited to explain the real data of communication,

that is, indivisible sentences.